







ては、ない。ばくたはばくたのちからだからって考へたんだ。天の川って汽車だって実在だ、ばくたそう感じていふのなんだから。もしさうん、ばくたといふにさういふところもさうずかぬにござらん。いいか。

そのひとは指を一本立ててしずかにそれを語らうとした。すると、いさむらじョパンニは自分といふうのが、じぶんの考へといふものが、汽車やその学者や天の川や、みんなないよにばくたとして光って、いふとなつて、ばくたともつてまたなくなつて、それが一つのがばくたともつてまた、あらゆる広い世界がそのいとひらけ、あらゆる歴史がそなわり、すつと消えたと、もうがら

[illegible]

「僕もつゝあんな大きな暗の中だつてこわくない。けれどもみんなのはんとおのさしいわをさがすには行く。どこまでもどこまでも僕たちいっしょに迷ふでござんす。」

「ああ、それと行くよ。ああ、あすこの野原はなんでもきれいだろう。みんな集まつてるねえ。あすここにいるのがほんとの天上なんだ。あつ、あすここにいるのがほんどのお母さんだ。あつ、あすここにいるのがカムパネルラはむかしに望の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。」

ジョバンニが言いました。  
「僕わらない。」カムパネルがぼんやり言いました。  
「僕たちしかりやろうねえ。」ジョバンニが胸い  
はなして、新しい力が湧くように、ふと息をしながら  
言いました。  
「あ、あす二軒貸束だよ。そらの売上げ。」カムパ  
ネルが少しそのことを覚えるようにしながら、天の  
川のひととを誇示しました。  
ジョバンニはそれとなく見て、まるでぎくっとし  
てしまった。天のひとと、ここに大きなまっくろ  
いものが、どんとわっているのです。その底が

はもう半分以上も空いてしまふにわかにわかに上つて、さびしくなり風といつぱいに吹き込んできて、そして見ていてるとみんなはつつましく行列を組んで、あの十字架の前の川の川沿のなごみにひびきまわつて、ひとりのこころうしろの白いきつめの人がたづねのぼしてそこへ来るのを二人は見しただけれどそのときももう碩子の呼び子も鳴らぬ汽車はうごきだして、と流れて来て、顔の露が川の方から、すうと流れて来て、またさびしくなり何も見えなくなつてしまふ。ただたゞさびしくなり何も見えなくなつてしまふ。ただたゞさびしくなり

だんめゆるかななり、とうとう十字架のふもとど  
う向かへに行つたさうです。青年は男の子の手を  
さし、はやくにええやと同等なやうにやうだんを  
し、さうして出口のへきでふり出し、  
「じやなよ」女がふりかえつて二に言  
ひました。  
「さうな、ジョハニはまるで泣き出したの  
をこらへておつたよにふつさばうに言ひ  
ました。女の子は、いかにふつさうに眼を大くして、  
男の一瞥につきもつかうて、それかめとほし  
もつたで出て行つてました。汽車の中

[illegible]

「それだ。」見たまへ。そこらの三角標はちやうど  
さうだ。三つ角の影にならってゐるよ」  
ジョバンニはなつてゐるその大きな火の肉二つに  
三つの三角標が、ちやうどさそりの腕のまゝに、  
ここに五つもの三角標さそりの尾やかたのよう  
にちらんでゐるのを見つけた。そしてほんたうの  
そまづき赤うつくしきさそりの火は青くくあ  
るゝくあるゝく燃えてゐる。

「その火がだんだんうしろの方になるにつれて、  
みんなはなんともいふやうにぎやかな、さびさ  
の葉や草花のともにおきやうなものな、それはもう  
さそりやうなうしろを聞ききました。それはもう

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

お父さんで、お母さんも狂気のようにキスを送りなされてるが、ふたりの間にうしろにうしろに立てているなど、もうその間もまざれようでした。そのうち船はとうぜん沈みぬきから、私もほかの客も、もうすっかり覚悟して、この人か二人を助けて、浮かべるだけの浮板とか船破けの荷を持ってきた。誰かが浮板がタイダイグの一枚飛んで来たらいいけれど、僕ってずっとずっと向こうへ行ってしまった。私は一生けん尽で甲板の椅子についたとこをはなして、三人そんじでくちとりきました。どこかと三〇六番の音がかりました。たちまちみんなはいろいな国語で「べん」をそれをつたい

[illegible]

ば、いかに吹かされていようやきの木のように姿勢で、男子の手をしかつかうて立ってゐた。そして、青年の、ここぞと云ふやうな、まゐり、きかれたら、青年のしるしにも、ひとつ、十二ばりの黒い茶いふのを愛する女の音が、黒い外套を着る青年の胸にすがつて不思議そうに窓の外を見ているのを見た。まあ、ここはラン・カシヤイ、だ、や、コンネ、タチナコト、何だ、い、あ、はくたは、い、さへ来たのだ、わたしたちは天行くのです、こゝろなんかい、あしは天のしるしです、もんなんかい、わたくしと云ふは、わたくしたちを神さまに召されているのです、一黒服の青年はよろこ

とを考えたためだろうか。カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわった。そこが、お花畑のほんとうに平原においでだよ、そこが、お花畑のにおいする一。

「ジョンニはそろそろを見つけたがやっぱそれは悪かたなはもって来るらしいのでした。いま秋から野英の花のにおいするはずはないとジョンニは思いましたよ、うややとした葉、髪のかげり、ひかりの男の子が赤やジャツのぼたもつ、びくびくした顔をして、お花畑のにおいがしたるまではだして立っていました。顔に

飾りの時々たいたしともんだいようように、もちもちもを見ているのがはやりわかりました。もう三つ葉の仲夏の「ヨカメ、ネムルガ向こう岸の」のうたに似た小さな青じい、三角が顔と地味を見えなくって言い。にわかに、ギパンニはなんだかわけわからずに、にわかにとりの島飾りがきびきびとでたまらななりなりました。白きつがたまにさいさいしたらなりなりました。いざそれでそれをするの娘んだり、ひとの切符びびりたりしたように横目で見てあわてはれたらなり。そんなことを一々考えていて、そのときを見ず知らずの島飾りのために、ギパンのときを見ず知らずの島飾りのために、ギパンの

[illegible][illegible]

「急な病で死なれて、兵隊が鉄砲にあたて、死ぬのとような形をして、と思つた。でも、この島轉りの形はなくなつて、かえつて、あせひせいにした。どうもかたにちもよう、合うは、確にいてゐるから、いいことはありせん、な」とうきおお太のあやかしが、ジョバンニの隣りにうさへた。見るとその隣りは、もうそこにとつて来た、きんちとそへて、一つずつ進む、直してゐるのだった。

「どうして、あんなに、いっぺんにこゝへ来たんです？」ジョバンニが、なんだかあたたまふのやうな、あたりまえでないやうな、おかしな笑ひして問ひました。



